

論文の内容の要旨

論文題目 ロートレアモン 越境と創造

氏 名 石井洋二郎

19 世紀フランスの重要な詩人としてしばしばランボーと並び称されるロートレアモン（本名イジドール・デュカス、1846－70）は、移民の子として南米ウルグアイの首都モンテビデオに生まれ、13 歳のときに大西洋を渡って南仏ピレネー地方のタルブとポーの高等中学校に寄宿生として学び、21 歳でパリに上京し、ロートレアモン伯爵という筆名で『マルドロールの歌』という特異な散文詩を、本名で 2 冊の『ポエジー』という断章集を出版した後、わずか 24 歳で原因不明の死を遂げた。その生涯は度重なる「越境」の連続であったが、それは単なる地理的移動にとどまらず、南米から西欧へ、地方都市から首都への文化的越境でもあり、さらには詩人の内面において生起するさまざまな象徴的越境の軌跡でもあった。本論文は、彼の作品をその生涯とからめながら、「越境と創造」という地域文化研究的観点から総合的に読み直すことを目的としたものである。

序章「ロートレアモンはどう読まれてきたか」では、これまでのロートレアモン研究の歴史を四段階に分けて整理した上で、本論文をその後に来るべき第五段階の作業として位置づけた。具体的には、実証研究とテキスト分析を融合させた「批評的評伝」という形で、従来の研究に新たな地平を拓くことが本論文の狙いである。

第 I 部 モンテビデオ

第 1 章「母」の喪失」では、「生まれながらの越境者」としてモンテビデオに生を享けたイジドール・デュカスの母親喪失経験について論じた。不在の母親は、近親相姦のタブ

一を示唆する「顔」として、あるいは犬たちの「無限への癒しがたい渴き」を語る「声」として、越境を禁止しつつ誘惑する両義的な役割を果たし、『マルドロールの歌』に深い痕跡を残している。

第2章「言語という「外部」」では、二言語併用者としてのデュカスに焦点を当てた。西欧移民を中心に構成されたモザイク都市モンテビデオで、フランス語とスペイン語の二言語併用者として育ったデュカスの文章には、しばしば規範文法を逸脱したフランス語表現が見られるが、その多くはスペイン語の言い回しの無意識的な模倣である。しかしこうした文化的二重国籍者としての混血性は、逆にのちの文学創造の原動力ともなった。

第3章「災厄の記憶」では、モンテビデオにおける疫病の流行が作品にどのような影を落としているかを検証した。19世紀半ばのモンテビデオは「大戦争」^{グーラ・グランデ}のさなかにあり、戦乱と流血の風景が半ば日常的化していたが、「黒い嘔吐」と呼ばれる黄熱病の流行は特に少年デュカスの記憶に強烈な印象を焼き付け、『マルドロールの歌』において「毒の浸透」という形で主題化されている。

第II部 タルブとポー

第4章「天使との遭遇」では、13歳ではじめて大西洋を渡ってタルブの帝立高等中学校に入学したデュカスの生活と心理状況を素描した。寄宿舎の閉塞的環境や南米との文化的落差は、彼の切実な脱出願望を増幅したと思われるが、そんな中で彼の慰めになったのが、後見人の息子であった六歳年下の美少年、ジョルジュ・ダゼットとの出会いであった。その存在はデュカスの男色的愛憎と歪んだ攻撃性を触発する契機となっている。

第5章「吸血鬼の形象」では、そのダゼットの名前が第一歌第一稿からを経て最終稿へと書き換えられていくプロセスを、特に「吸血」のテーマに沿って追跡した。書き換えの対象は蛸や虱など、なんらかの形で吸血行為に関係する動物たちであるが、これらは皮膚という境界を突き破って相手と同一化する行為を表象している点で、第3章で見た「毒の浸透」とは逆方向に作用する越境行為の一形態を表している。

第6章「寄宿舎の悪夢」では、デュカスのポー時代と切り離すことのできない「寄宿舎」という閉鎖空間について検討した。その鬱屈した生活の痕跡は、「不眠」のテーマに集約されている。眠らずに直立姿勢を保つことで創造主による自我への侵入を忌避する話者の「私が存在しているからには、私は他者ではない」という有名な言葉は、自己充足的な近代自我の同一性を脅かす「他者」の訪れを告知するものである。

第7章「甦る肖像」では、ポーの高等中学校で同級生であったポール・レスペスの書簡を手掛かりにして、デュカスの創造行為にさまざまな角度から照明を当てることを試みた。残された九通のうち、第一書簡からは詩人の創造の源泉となったさまざまな読書傾向や文学的嗜好を知ることができるが、特に越境の主題との関係で重要なのは、詩人の文学的想像力を引力の呪縛から解き放つ「泳ぎ」のテーマである。

第8章「文学と数学」では、教養のレベルにおけるデュカスの越境に注目した。レスペスの第二書簡を読むと、デュカスが博物学にたいして並々ならぬ関心を抱いていたことが

うかがえるが、『マルドロールの歌』に現れる鶴や椋鳥の飛行の描写から見て取れるのは、むしろ幾何学的図形にたいする明確な嗜好である。特に V 字形や円環のイメージは、この作品の展開と密接に結びついて主要な主題論的機能を果たしている。

第 9 章「孤独な「不可解主義者」」では、レスペス書簡の未発表部分を概観した後、高等中学校の最終学年である哲学学級の教科書に見出された「不可解主義哲学者デュカス」という書き込みについて考察した。少年読者との切実な合体願望とその挫折というテーマとの関連から見れば、この言葉はページという境界を越えて合一することができない孤独な状況を反映したものと解釈することができる。

間奏曲

第 10 章「モンテビデオふたたび」では、ポーの高等中学校を修了し、文系・理系のバカロレアを相次いで受験した後、ふたたび大西洋を渡ってモンテビデオに一時帰郷したデュカスの短い南米滞在について記述した。彼は現地でエジプト学者のガストン・マスペロ、庇護者的立場にあったペドロ・スマランなど、何人かの人物と接触をもった可能性があり、その記憶は『マルドロールの歌』や『ポエジー』に見え隠れしている。

第Ⅲ部 パリ

第 11 章「首都の魅惑」では、いよいよパリに舞台を移し、オスマン知事の改造事業によって面目を一新した都市空間におけるデュカスの軌跡をたどった。モンテビデオとフランスの地方都市しか知らなかった青年デュカスは、はじめて目にする首都の熱気と活気に圧倒されながら、新しい環境の中でイスパニック系中南米人のコミュニティと接触し、やがて第一歌の出版に漕ぎつけた。

第 12 章「「ロートレアモン伯爵」の誕生」では、第六歌までを含む完全版の『マルドロールの歌』が製作されるに至る経緯を述べ、その表紙にはじめて記された「ロートレアモン伯爵」という筆名の意味と機能を解明した。ウジェーヌ・スューの小説『ラトレオモン』と詩人のルコント・ド・リールの名前から想を得たと思われるこの固有名詞は、綴りの中に *l'autre* (他者) という単語を含んでおり、さまざまな解釈可能性を示唆している。

第 13 章「パリの表象」では、デュカスの目に映ったパリが『マルドロールの歌』にどのように表象されているかを概観した。パリは第二歌にはじめて姿を現すが、その光景は想像力によって多かれ少なかれ虚構化の操作を施されている。一方全体が小説仕立てになっている第六歌では、実在の街路や建造物がリアルな形で登場し、その記述はより具体性を帯びている。

第 14 章「垂直性の詩学」では、「垂直性」という観点から『マルドロールの歌』のいくつかの章節を具体的に分析した。このモチーフは仰臥と直立、懲罰としての雷雨など、主題レベルで変奏されているだけでなく、言説のレベルでも主要な生成原理になっている。たとえば第四歌の書き出しでは語り手が「人間、あるいは石、あるいは木」とであるとされているが、これは文章そのものがもはや単一の主語に担われた求心的な散文ではなく、垂直に切り裂かれた断片の集合にすぎないことを示している。

第 15 章「マルドロールの身体」では、マルドロールの身体に注目してこの作品の特質を探求した。通常の意味での「身体」をもたないこの登場人物の描写において、特に目立つのは唇や額といった個別的な身体部位への頻繁な言及であり、それらはけっして全体としての完全性を獲得することのない一種の「身体なき器官」を構成している。これは基本的に一貫した物語をもたない『マルドロールの歌』というテキストそれ自体の比喩にほかならない。

第 16 章『『ポエジー』の方へ』では、もうひとつの作品である『ポエジー』について、まずその成立過程を略述した。完全版の『マルドロールの歌』が発売中止となった後、イジドール・デュカスはこれら 2 冊の小冊子を本名で刊行し、匿名から筆名へ、そして本名へと、いわば「名前の越境」を実践した。「私」の自己同一性を自ら攪乱することでしか「私」を定立することができない越境者特有の内的葛藤が、そこにはうかがえる。

第 17 章「真理から遠く離れて」では、『ポエジー』というテキストの特異な性格に論及した。この作品はそのタイトルに反して、いわゆる詩集ではなく、散文で書かれた断章集である。そこでは「私」がもはや何らかの意味の担い手としてではなく、他者の言説を借用し修正する引用装置として現れる。「列挙」「書き換え」「断章化」等の操作によって、デュカスはロマン主義からポストモダンの地平へと一気に「越境」し、いかなる真理にも依拠しない新たな言説空間を切り拓いたのである。

終章「越境と創造」では、デュカスの死にまつわる状況を述べた後、以上の議論を振り返りながら全体を総括した。彼は越境経験を侵犯の快楽や切断の苦痛も含めた普遍的な主題として深く内面化し、突出した過激さとアイロニーをもって言語化したことにおいて際立っている。「ロートレアモン」とは、越境することと創造することを同時に実践したイジドール・デュカスの「別^{ロートル・ノン}名」にほかならない。